欧米環境対策あれこれ

福岡県環境整備局企画課長　村　上　道　隆

欧米公害調査団（自治省，県，市の公害担当者12人）に加わり，5月6日から28日まで23日間欧米7国（アメリカ，イギリス，フランス，オランダ，西ドイツ，スウェーデン及びソ連邦）をかけ足歴訪し，見聞きしたことをのべてみたい。

都市における石炭の使用禁止という思い切った燃料規制等は別として，発生源対策は，法制度的には我国よりすすんでいるとは感じなかった。しかしながら我々のまわりを，都市を，全体としてとらえ，人間環境という総合的な観点から対策がとられている点は学びべき事であった。ちなみに公害という言葉もなく，相当するものとしては環境汚染という言葉であらわされている。

われわれが歴訪した都市もすべて，単なる居住空間の集りではなく，下水道の普及は勿論だが，緑地，公園が随所にあり，美術館，博物館，町の角角の記念彫刻，劇場，戸外リクリェーション施設等々総合的に整備しており，すべてについて発想の根本からわが国とは差があることが感じられた。

ア　メ　リ　カ

アメリカでは，日々都市に流入して来る黒人問題及び自動車公害対策が一番大きな課題との印象を受けた。

「最近のロスの若者は山を見たことがない」と言われている。ロスアンゼルス市の大気汚染は，その9割以上が，唯一の交通機関である自動車に原因しており，全米では大気汚染源の75％，都市騒音の80％が自動車に起因，年間900万台にも及び自動車が無断路上放棄されるという事等からしても，市民の手となり足ともなっている自動車が今では環境汚染の一大原因になっている事がうかがえた。

ピッツバーグ市では，ルネッサンス市を目指して大車輪で，ＵＳステールを始とする企業群のスクラップアンドビルドが進行していた。これは，公害防止の為の改善と企業の設備更新の時期（現生産設備では日本にたちうち出来ないという話も聞かされた）が重なりあったためである。

ギャングと屠殺場の町シカゴも面目一新されつつあった。石炭の使用禁止も本年末には全市にゆきわたり，市の下水は，ミシシッピー川を通じてメキシコ湾に放流されており，ミシガン湖への放流は水門によって遮断されていた。巨大な下水処理施設の建設も進行していた。

ニューヨーク市は，人口1,600万～1,800万の世界最大の都市で市当局は，典型的な都市公害の数々をなげいていた。マンモス台所からの廃棄物についてはもっとも頭をいため，容器の改善，再利用出来ない容器は税金による使用抑制，収集能力の向上，再利用の検討，埋立地の広域確保，海中埋立による海流変化の生態系に及ぼす影響調査，ひいては巨額にのぼる経費の苦面等々あらゆる面からの接近がこころみられていた。廃棄物対策のためアパートの建設に当ってのゴミ焼却炉建設を義務づけたが，大気汚染の原因となり，廃止せざるを得なかったという話も聞かされた。

エンパイヤーステートビルを上廻るビル（そのビル一つで10万都市相当の消費電力が必要）の完成も間近であったが，電力不足は焦眉であり，しかもSO_2汚染はわが国をはるかに上廻る現状であった。市の周辺に発電所が散在している姿も奇異の感じをうけたが，国連ビルの直ぐ傍（クレムリンの直ぐ傍にもあった）にも発電煙突がうすい煙をはいていた。

また，上水処理施設の建設に当って，市民の建設反対対策もあって，処理場には屋根をかぶせ，その上は緑化して公園，リクリェーションの場とし，発生ガスはゴミ焼却の熱源とし，ボイラー廃熱は発電に利用するという総合的な計画がすすめられていたが，井の中の蛙であった私を思い知らされた気がした。

マンモス化した巨大都市のこれら環境汚染対策を総合的にすすめるため，リンゼイ市長は環境保全総局を設置して取りくんでいる。

ロ　ン　ド　ン

有名なロンドンスモッグも石炭使用禁止（エネルギーバランスは重油6，ガス2，電気1.5，コークス0.5）により解消し，青空がよみがえり，従来生育しなかった植物もみられるようになったとの事であった。唯ビルの白黒（雨に洗われた所が白）のまんだらに往年のスモッグの名残をとどめていた。

テームス河も徹底した対策により，約40種の魚が住むようになり，これを表現して「テームス河の鮭一匹25万ポンド（2億2千万円）の価」という話を聞かされた。ロンドン塔からみたテームス河は，雨上りの故であったか何うかは聞きもらしたが泥色をしていた。しかし，岸辺には綺麗な砂浜をみることができた。

パ　リ　ー

満都これ博物館という感じのパリ市で印象的であったのは，住民20人に1本という緑の樹木，毎朝水を流すことによる道路の清掃等であったが，この清掃方法もセーヌの汚染との関係で反省されつつあるとの事であった。

ロッテルダム

オランダでは，スイスから1,000 Kmのライン河口のユーロポート大開発地区を見学した。25万トン船入港可能欧州唯一の港，北欧最大のコンテナ基地，貨物取扱量225万トン／年，シェル，ガルフ，エッソ，カルテックス，ブリティシュ，ペトロリカ等世界の石油企業の進出(700万トン／年)等大開発がすすめられていたが，高煙突拡散方式をとるとともに徹底した住工の遮断が，水路，緑地帯等によって行われおり，水深50mの人造湖は遮断地帯，工業用水源，リクレーションの場等の多目的に使用されていた。自動車道に併行して自転車道（市内は車道，自転車道，歩道の3線）も設置されており，これらは今後の工業開発に自然保護との関連においても大いに参考になった。

フランクフルト

ここでは上水源を，ラインの水を附近森林地帯に散水してその地下浸透水にもとめている。それ程ラインが汚染されており，またそれ程森林地帯の多いことを示すものでもあるが，市自体の清浄化排水にもかかわらず，上流州の化学工場汚染排水により，対策のとりようがなく，余りにも強い自治権へのうらみと連邦の権限強化を望む声が市当局者から聞かれた。

アメリカの州際処理，廃棄物の投棄による北海汚染，ラインの国際汚染等州間，国際間問題の数々を見聞することができた。

また大気清浄化のため，緑の山間部から吹きこんで来る風の回廊には，高い建物，樹木を植えることを州法で禁止していた。

ちなみに産業開発に対する姿勢としては，石油化学等が来る場合20年後附近森林が何ういう影響を受けるかまでを検当し，その結論が出ないときは進出を許可しないという事であった。

また環境汚染を ppm でではなく，人間より抵抗力の弱い自然の植物（コケ）の生育状況によって総合的に判断しようとのこころみがなされていた。

ストックホルム

国土は日本の1.5倍，人口は800万人のスウェーデンは，飛行機から眺めた印象では森と湖の国という感じであり，予想に反して非常に清潔な印象を受けた事も報告しておきたい。工業開発に併せて徹底した自然保護政策（健全な戸外リクリェーションの場建設も含む）がとられている。下水処理も3次処理まで行なうとの事であった。処理場からのスラッヂ処理も食物循環を経て人体に何う影響するのかがまだ解明されていないことを理由として2，3年前，肥料還元から焼却に切りかえられていた。水銀汚染による魚獲禁止も最近解除したとのことであった。

なお公害防止技術の開発，技術の輸出により国民経済の向上を図ろうとする積極的な意気ごみも伺えた。

モ　ス　ク　ワ

市当局を訪問したが遠大な都市計画や地下鉄計画，市民からの公害苦情（特に騒音多し）が寄せられるという話が印象に残っている。

なお下水処理場の排出基準の一つとして，「所長はその水を飲む」というノマルがあるとの事であった。

5月28日シベリア上空を経て羽田に帰ってきたが東京の空が一番汚れていたのは印象的であった。